

特 10

779

人情小説

七人女

田村六因居士著

京都

五亭楼



No. 14479

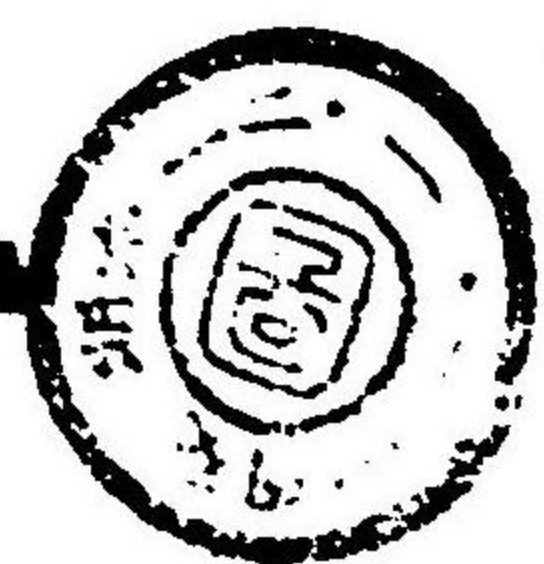


西村天因居士著

京都

五車樓

七之巻



題待

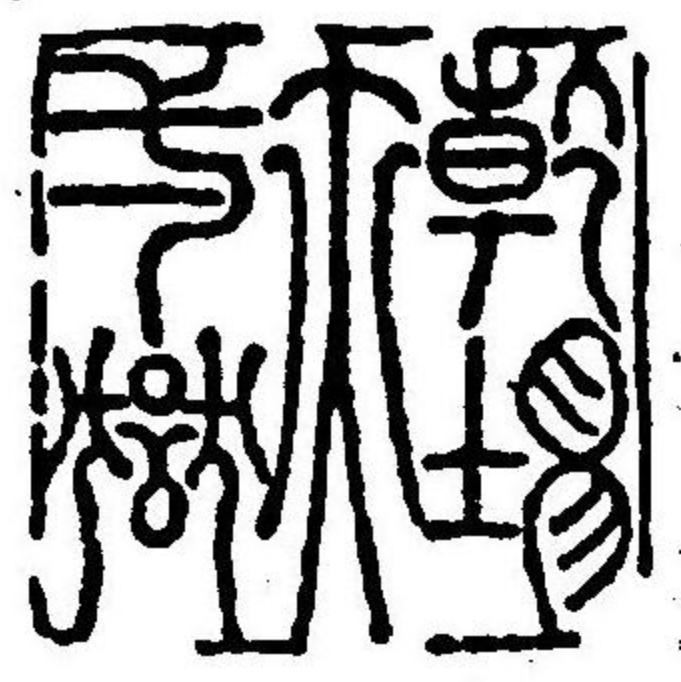


憐山憐水又憐
花廿四年來未
有家寄語風流

詞以原客多將文

字誤生怪

天因病客自題



緒言

書林何某。一冊の草稿を印刷せんとして。先づ其頁否の鑑定を乞は、やと。携へて某博士に至りけるに。博士一見して。此は無二の奇書なり。世の文學をも。資くへければ。速に出版せよと勧められ。何某小踊なして打喜び。再び某學士に携へ行きしに。博士の説と符を合する如くなれば。奇貨居くべし。濡手で粟は此書なりと。急いで印刷なし。製本萬事入費を厭はざ。美麗に仕立て賣出せしに。何ぞ圖らん大的はづれ。三三百部學士間に賣れたるのみ。其餘は蠹魚の食となれり。其後又一部の草稿を得しかば。懲すまに某博士を訪ひ。此書は如何と差出せしに。博士は一見して無用の書なりと。投返せしと。又も

二
某學士に見せけるに。博士の言ふ所と同じ。何某手を拍
て一笑し。此ぞ我店の搖錢樹なれとて。直に出版せしに。
四方の注文引も切らば。忽にして前日の損を恢復せし
とぞ。シテ見れば盲の世界とおぼし
如何なる書か賣れて。如何なる書が賣れぬかは。世間の
人智如何に在る事にて。賣れぬからとて悪書と云ひ難
く。賣れたりとて好書とは評し難し。去れば文を作り書
を著さんとするもの。賣れる賣れざるに頓着せど。只我
身一人を本尊として。浩々乎として筆を下さんのみ。曷
んそ俗に媚ひ世に阿りて已を屈するを是れなさん。
今の著書世界を抱關擊拆の場所と心得る者多し。何ぞ
や草稿料を以て祿に代ゆればなり。草稿料を貪りし以

上は。書肆の泣言を聞かざる可からば。書肆の泣言を聞
し以上は。賣れそうな書を著さゝる可からば。賣れそう
な書を著さんと欲せば。盲を本尊とせざる可からば。是
追々著書世界の腐れたる所以なり。
予は決して其仲間には非すと云んと欲すれども。恐らく
は世人の許さゝらん事を。甚だ迷惑千萬なり。去れど幸
にして世に阿ねり俗に媚るに不器用なれば。我腕は我
心の命に従ふて。艶々しき話に趣かばして。偏屈なる談
柄を好み。艶々しき話は河豚汁の如し。甘けれども跡
腹の懸念あり。偏屈なる談柄は茶漬の如し。まづけれと
も食傷の氣遣なし。予が河豚汁を御馳走せどして茶漬
を進らすは。世人を愛する一片の老婆心のみ。其て賣

れは世人が我儘なり。我も腹立てじ。書肆も亦泣きや
るな。
言葉は「どす」「おす」「やす」「おへん」「そうへ」など。京訛を
用ひたらんには。耳新らしかるべきも。居士物真似は甚
不得手にて。徹頭徹尾京語を寫し兼たり。片言まどりよ
りは。寧ろ東京言葉にて。あつさり寫してこそ茶漬のお
茶にもならんかと。聞慣れし言葉を用ゆる事とはなせ
り。許し玉ひてよ此書を讀み玉はん人々。
明治廿一年の秋の末つかた西京客舎終屋にて。友人愚
仙が嵐山より折歸れる紅葉の枝を眺めつゝ。

天囚病客しるす

さいなみ

目次

第一回	船中	發端	旅行
第二回	少年		
第三回	閱歴		

特10
779



浮世は様々なり。昔日、云は、武者修行。或は伊勢参り。朝ど
 く起出、て驛路をはなれ。四方山の朝け、いきを眺めつゝ。急か
 ぬ旅の杖を引き。樹下石上。いこふも行も心の儘。氣も心をす
 がく。く。是ぞと云れぬ中に深き樂あり。威變れば品變り
 て。物の言さま話振より、男女の髪形など。見るもの聞くもの

天囚居士著

第四回

老僧

第五回

乞巧

第六回

閨秀

第七回

瀨車

以上

面白からぬはなく。覺へず獨笑する事もあらん。晝比になり
ては足の運びも自ら疲れ来て。同一路程を装度となく里人
に問ふに。已は二三里も来いと覺しきを。まだ五里なり六里
なりと云ふ。我身の疲れたるはいらで。却て教へし人の恨め
しく。猶路程問はずもかなと思とも。繰返しし問試むるも
可笑し。凡へて此等は苦の中の樂にして。やがて日も暮なん
とする比トある宿場に着けは。左右の宿屋より飯盛女など
の。棕櫚箒のやうなる髪に。赤き小切を結び付たるも。誇顔に
て。南瓜のやうなる顔に。愛敬こぼして。出迎へつゝ。濁みたる
聲張上げて。泊り玉へ客人。泊らんせなを呼止むるも興あり。
まろふが如く。椽端に腰打かけて。肩なる小包なけ出せしと
きは。鬼の首取りしよりも嬉しく。一穗の燈。一杯の酒に。勞を



さく波や
まがの浜松
ふりかたり
怪世不
むろ
子曰
あつん
徳成

忘れ難きを慰め。行先の日一日と近づくを樂む。傍に妻子のせ
がむ聲を聞かす。後に債鬼の追來る影を見ず。人生双肩
の重荷を旅枕の下に棄却して。飄然華胥の樂天地に入る。實
に旅ころ憂の棄どころとは云へ。其も一の蕩落なれど。商賈
の爲め。或は公用の爲め。進まぬ足を踏出して。馴れし故郷を
跡に。つ。吾愛ら。い。き。妻子に別れ。吾慕は。い。き。親。昆。弟。に。離。れ。
身は地角八千の遠に在りて。魂を天涯萬里の空に飛は。い。水
のやうなる。象の中。に。旅の衣を片。い。きて。枕紙の。い。め。り。勝。な
る。夜。な。く。夢も結ひあ。え。ず。更。る。に。つ。れ。て。際。間。洩。る。夜。風。の
暗。撃。か。す。か。に。聞。ゆ。る。梢。の。鳥。の。聲。援。弱。は。り。果。た。る。旅。の。勇。氣
の。拒。ぎ。兼。て。窓。を。開。け。は。中。天。に。磨。き。す。ま。い。た。る。月。の。亦。胸。は
斷。れ。骨。は。挫。け。魂。も。身。に。う。は。さ。こ。ろ。飛。ん。で。故。郷。へ。歸。り。や。す

らん。西も東も空は一つ。同じき月の影なれば暗見に起され
て見る母もあらん。闇の戸とさしかねて。物思ふ妻もあらん。
木傳ふ猿の子を呼ぶ。野邊の鹿の女戀ふ。何れか月に泣かさ
らん。分きて旅の空の月ころ人殺しの罪あるなれ。月の下の
尾花ににける露の色露にすだく虫の聲。皆旅人を攻むる奇
手の軍勢。如何に心剛き武士も。此に打勝つへくもあらず。
まじきものは旅にありける。
其も路用に事欠かずば。百里を一日に行くもいと易し。身大
名となるも難からず去れど金なくて旅に出んは生て地獄
に行くに均し。旅籠屋の熊鷹。酒屋の鬼。飲食店の狼。爪を研ぎ
牙を鳴らしてよき小鳥もがなど待つもの。其幾千なるを知
らす其のみかは新道渡場。路銀を食るに猶豫せず。此奴無錢

四

と見るときは。畜に牛蠅を逐ふが如きのみならず。此の境界
に至ては。英雄も餓鬼なり才子も乞食なり。俊傑非常の人。村
柄を持ちまじと思ふも叶はず。征途迢々として日已に暮なん
どす。行客皆宿を求めて。我獨り樹下寺門に彷徨ふ朝日まば
ゆく輝いて。行客皆喜色あり。我獨り飢へて氣息奄々たり。鳥
雀の麥隴にあらるを羨みて。行路の艱難を嘲つ。人生の酸辛
此に過るものなかるべし。ましてや年少ふして志大に。氣高
ふして身貧しきもの。かゝる崎嶇間關の境に陥りては氣阻
み志喪ひ遂に其開かんとする才華を失ふもの。十に七八に
いて。後來の俊士を泥塗の中に陥没する妙からず。能其中に
奮起して。一難を経る毎に氣益熾なるはいと希なり。去れば
ころ獅子は其子を谷に落し。親は可愛い子に旅さすとかや。

五

襦衣飽食の徒に名士なくして。盛徳大業の人は多くは此の
艱難辛苦の中より生れ来るも。すべて其少時の閱歴にぞあ
りける。

長たらうき著者の旅講釋我が實歴と人や笑はん。實に然り。
半は實歴なり。實歴と聞見とを調和して。掻集めたる一擧の
談柄。晉湖に擬ふ硯の海筆をもて楮となし。机をもて舟とな
し。棹し出るさし波の波のけしきの拙くとも。忍ひて下文を
見玉んや如何に。

第一回 舟中

さゝ浪やこたかみ山に雲晴れてありの沖に月落にけり。
近江國長濱といへる處は。昔より商人多く住みて。繁昌の地
なりけるか。前ににほの水海空晴れけしきを渡し。後に
さゝもくさもゆる伊吹の岳を控へて眺望絶佳なり。今は鐵
道開けて舟車の便盛なれば。大津より蒸氣にて湖水を渡る
ものは。此處より上りて。或は敦賀へ。或は名古屋への鐵道に
乗り。敦賀名古屋より来るものは。此處より濃船の便を買ふ
なれば。往ふさ来るさの旅人引も切らず。湖東第一の繁榮を
極めたり。今も。午後に一時比にして。名古屋の二番車長濱
に着せしと覺しく。停車場より茶屋を目掛けて。降来る乗客
無慮二百餘人。封建の紀念を頭に殘せし。チヨン髷爺の赤毛

布をいかめしく肩に掛けたるが黒帽洋服の開化人と入り。笠に悟故十方空迷故三界域と書いたる善光寺詣の老婆は東髪して靴踏ならせる令嬢とすれ違ふ。或は大柳行李を息もたゆげに擔げるは貨錢を惜める商人と覺しく。古帽斜に肩怒りて吸なれぬ巻烟草をパツツカするは田舎人の京都見物と知れぬ。其他老弱男女散々發亂く。蜂の巢を出るが如く。蜘蛛の子を散すが如く。此方の茶屋に腰打掛くるもあり。二階に上りて中飯なすもあり。各發船の期を待居たり。此の茶屋の例として。へエくたつかれさまで彼方様も舟に召すか。昨晚はどちらに。へエ名古屋伏見町に。た名前。た國はなど。明細に書記したる紙と。木の札を客に渡して出行く名札は乗船場にて巡査に渡す。木の札は切符と

引かゆるものどいらる。頼て發船の時至れば。涼笛の聲もろどもに幾百の田舎もの開化人美人醜婦を載せて。沖合遙に出て行く。今日は誠に結構な日和。てこさいませす。左様てこさる。この景色は何處をさかして。もこさいません。彦根の城は立派なもので。形勢の雄壯なのは天下第一等て。よう。此節は大分城下はさびれて。凄しい事ヒやうてす。あれか竹生島て。これか沖の嶋て。ハア。左様てすか。彼方はどちらへ出です。へエ。京都まで。ハア。左様で。イヤ。私は東京より京都見物です。名古屋に暫らく逗留。したか。流石は雄藩の城下。繁昌な事。成ほど。同地は美人國てす。よ。どふも美人の多いに。は。驚きました。美人は物産の一として。よう。ア。うてすか。成

程名古屋は瓜實顔て。京都は圓顔か多い。ナァールほど一
体に丸顔を賞翫するのてすか。左様々々。名古屋もモ一京
都風てみんな赤裏に桃色の裏。奇麗てす奇麗だか。つこ
すきます。チ。ソ。ラ。なるほと東京の目と上方の目はちかい
ます。など山水美人合併の評。つまらぬ話も旅の書。晴。甲。板
の上。に。立。集。ひ。甲。問。ひ。乙。答。へ。て。閑。談。に。餘。念。な。し。折。し。も。上。等
室。を。出。來。り。一。箇。の。美。人。あ。り。今。ま。て。湖。山。の。勝。に。見。ど。れ。い
人。々。は。言。合。さ。ね。ど。も。視。點。盡。く。一。轉。し。て。美。人。に。集。り。い。か。つ
く。其。風。采。を。見。る。に。扱。は。美。人。か。な。ど。思。は。い。む。る。は。只。色
の。あ。く。ま。て。白。き。と。姿。態。の。楚。々。たる。に。因。る。もの。に。い。て。其。容
貌。い。ま。だ。必。ず。し。も。絶。美。と。稱。する。に。足。ら。ず。強。て。之。を。描。か。ん
も。詮。な。し。單。に。其。眼。の。涼。や。か。なる。中。に。一。片。高。明。の。相。を。含。め

るは衆美の揃ひたるにもまさりて身の實なるへ。衣裳な
り帯なり。藝妓舞妓を寫さんには必用なるへ。けれど。此の佳
人の人に愛敬さるゝは。別に無形に存するものゝ如くなれ
は。業と省て爲永に倣はず。忘れたり。年を忘れたり。年は二十
五六どいは。中らすといへども遠からざるへ。乗客の眸
を己に屬するを知るや知らずや。彼の高明清秀の眼を。船の
過來。方へ。注ぎ。つ。何か考へるか。如く思ふが如く。暫く構
干にもたれて。いめり。此美人をして。人の耳に入るほどの獨
言を云は。いめなは。著者も又聞。て骨折らすに。其意想を寫
し。出。し。得。へ。け。れ。ど。も。實。際。芝。居。の。や。う。に。獨。言。を。云。さ。る。は。百
年の遺憾己を得す。て其腦裏をえぐるに
ア。い。い。景色だ。誠に天然の景色は又格別だ。松島たの殿

鳴だのと云ふけれども、寫眞を見るに、とふも細工物のやうで規模が小さいが、琵琶湖は、コゝ引廻らした山の姿や、注洋浩蕩とても漢學者の形容しううな太湖の海面にチラ／＼見ゆる白帆の影は詩にも歌にも云れるものじやアない。免に角規模が大きい。云は、松島殿島などは才子風で、此處の景色は大人君子とても云ふものであらふ。成ほと才子だの奇人だのと云ふ人々が、其丈の事をするのは随分ゑらい人物には相違ないが、氣象の大きい、度量の測りがたい。大人傑でなくては、大事業は六ヶい。琵琶湖でも、其とふりだ。沖合に出て四方を見廻すに、此の景色はと一部分を指す事は出来ぬが、翠の屏風を方七十里餘も引廻した中に、浩々たる太湖を深へた處は、湖山の絶景と

云ふものであらふ。コゝ云ふ浩蕩の景象を備へてある處で、唐崎の夜雨だの、石山秋月だのと、八景の名目を付けるのは、ほんの詩人歌人の慰み事で、譬へて云は、或る大人傑を見て、書が出来る書が上手だと云ふ様なもので、琵琶湖の琵琶湖とも云れる景色は、外にあるのを知らないのと思はれるア、此の節は才子の世の中で、教育も才子教育と云ひろふな仕方だが、とふもこんな世間の模様では、琵琶湖ほどの人間が、今日に出来るのは六ヶいからふ。オヤ吾知らすつまらない事を考へ出して、オヤ早や三上山が見へる處に來た。と、きはなる三上の山の杉むらや八百万代のいるくなるらんと云ふ歌があつたが、成ほど此の山ばかりは翠の色がうつく、いものだ、此の左手の山

は皆名所で。平家物語太平記などにも。うつくうい文が出
 てゐるが。ヨーマア昔の人はあんなに書たものだ。
 など思續けてや眺むらん。折から船長部屋の方に當りて。い
 ど騒々しく。罵さわく聲かまひすく。今まで甲板に集りつ
 る人々は何事やらんと其處に馳せ集りけるが只騒がいき
 のみにて様子知れされば。「なんでげいよう。大方掬奴をい
 た奴があるんでいよう。ソいでいようか。イヤ。水夫などは
 氣の早いものだから。何かの間違で嘩喧でいようなぞ。附い
 つゝ近づいて見れば一箇の少年十七八とも覺いきが。顔色
 黒ふいて栗殻の如く眼光大にして人を射るばかりなるが。
 髪蓬々として塵埃堆かく。身に垢つき一重を着たり。兩手
 を組んで船長の前に立ちつゝ争論するにぞありけるなん

でいよう。何を云ふのか。聞いて見ようでは有ませんか。

年少年一只今も申上るとふり國元を出立いたすときも學資は四
 より路用とても用意をいたしませんで、氣のせくまゝ飛び
 出して來まゝして途中で種々の艱難艱難、勿論勿論悪い事と有ま
 じき事と良心には存して居ながら、水夫の目を掠めてこつ
 ろり乗込みましたがいまさらなんともいたう方がござい
 ません。下等室の隅でつくぐ考ますに。上陸の折にはどふ
 しても御手数敷をかけ、其のみならず稱衆の前で耻辱を蒙る
 事になりましかもいれず。これはいつろ着船せんうちに、船
 長の仁慈を仰く方がよからふと思ひまゝして、かやうにわ
 びをいたすのです。どふかイニ切符を買はんで乗るべか
 らざる事は存じて存じて居ますけれども、御覽でも分る

位の難儀陸を行ふにも足は疲れる其上食事さへ成ほ
 ど巡査にを引渡しを願ふ位なら箇様に願はいたうませ
 んが。一旦巡査に引渡されると、宿送りに國元へ返されるは
 必定です。其ては私の大志イヤ國元への大耻辱成程船
 を跡へれ戻しになる事も出來すまいが。どふか此儘にね
 見のがしをねがいます。此の湖水を渡つて、トニカッ京都ま
 てたどりつきまゝたなら、又分別もありませんから。どふなどい
 たして素志を遂げられぬ事もありませぬ。ううなればひ
 どへに閣下の大仁恵長勝手な事はかり言ふなイ。ナンマ
 ど書生だ。ン書生と云ふものはな少くも月に五圓ヤ六
 七圓ハ學資が入るのだ。破れ一重一枚で。學問が出來ると思
 ふか阿房ものイ。なんでも書生だと云へは。無理がどふると

思ふて人を欺ましても其手は喰はチ。貴様は乞食だら
ふ。イヤわりやア乞食に相違ない。其ども拘奴でもして。取捕
られろうになつて逃て来たのか。不埒な奴だ。不届な奴だ。ど
ふして又切符なくに乗込んで来やがつかうらん。盗賊た
けく。い。と。よくもく。づう。く。く。無銭で乗せて呉ると名
乗て出やがつたナ。相ならん。出来んと云ふに。渡船の
施しをして居るのヒやない。商賈船だ。營業だ。只で乗られる
か。盗賊。メ。面相がどうしても盗賊に違ひない。目ばかりギ
ロ。く。させて。人の巾着ばかり狙つて居る顔だ。成程ようく
見ると悪てらしい顔だ。十七八と一か見へないのに。よくべ
らく。饑舌る處は曲物に違ひない。馬鹿野郎いけな。いと云
ふに。ウ。ン。ニヤならぬ。何をくづ。く。ぬ。か。い。や。が。る。ん。だ。糞
垂

彦根に着いた時ぬかいたらすく。巡査に引渡したものを
。だ。ま。れ。盗。坊。ナ。ニ。小。頼。ナ。年。少。此。は。餘。り。失。敬。な。我。輩。が。わ
る。い。か。ら。足。下。に。頼。む。の。だ。人。を。泥。坊。失。失。失。敬。極。ま。る。
水。ナ。失。敬。だ。と。馬。鹿。に。い。や。が。ん。な。い。魚。棒。メ。な。ぐ。る。ぞ。此。の
蓄。生。な。ぐ。れ。く。年。少。ア。イ。ク。此。は。失。敬。ナ。殘。念。と。も。が
け。を。振。放。せ。を。ゆる。さ。ば。こ。ろ。情。容。赦。も。水。家。業。帆。檣。に。均。し。き
荒。拳。を。續。け。さ。ま。に。滅。多。打。凍。雀。の。餓。鷹。に。搏。た。る。如。く。瘦。羊
の。飢。狼。に。逐。は。る。如。く。足。に。ま。か。せ。て。逃。れ。ん。に。も。艘。外。蒼。々
たる。太。湖。の。沖。合。只。彼。の。暴。卒。虐。夫。の。所。爲。に。ま。か。す。る。の。み。縛
れ。く。と。呼。り。て。罫。の。綱。も。覺。い。き。繩。も。て。七。重。八。重。に。緊。縛
あ。げ。た。り。此。時。ま。で。も。見。物。の。乗。合。は。出。て。救。は。ん。と。す。る。も。の
なく。ひ。と。い。事。を。く。さ。る。ナ。あ。ん。ま。り。ひ。と。ひ。奴。等。だ。い。か

彼奴も大胆ではありませんか。盗坊だと云ふ事だが。切符も
 買はんで乗りつたと見へる。成程相良は選まい骨柄で。
 一曲ありうに見へますが。人品は何處か威のある良で。ま
 んざら盗賊とも見へませんナ。左様くけれども眼光が只
 者では有ません。年ア一悔い。殘念だ。……
 鬚眉英雄盲且愚。天下人情簿於紙。俠骨獨存柔風中。俊傑往々
 泥塗死とは。天四居士が嘗て某氏に贈れる。書威長篇中の一
 解なり人を知る眼なきものは臂を交へても其賢愚を判た
 ず。其神を知るものは遠く千里の外に交る。實に世は目明一
 人に盲千人とかや昔より英雄豪傑の器を一世に擧げ名を
 千歳に残せしもの其成長を尋ぬるに。匹夫下賤の中より起
 りしもの多し去れば其名も譽もなき時には。たとへ一たひ



當世の高官に遇ふも其风采の卑げなるを侮り其衣裳の
見苦しきを厭ふて言葉だにも掛くるものなく服装帽子華
美を盡し綺羅を極め物の言振り嚴かに應對辭讓透幅を飾
るものは君子才人のこと尊敬只ならされども曷ろ其凡庸
の小人ならざるを知らん。一は己の位高きを笠に被て万人
を眼下に見るの過にして。一は人に依て己れを利せんとす
るの慾心其聰明を蔽ふが爲とぞ知らる。其俊士を間關の中
より救ひ英雄を艱難の間に助くるもの間々かよわき婦人
の身にあるは昔より聞傳ふる所なるが巾幗柔賦の眼。蛾眉
男子に比べて一等高きものは其氣沈みて意遠く其神靜に
いて理明なるに因るにやあらん。めでたくも尊き例にこそ。
間話休題彼の少年は荒繩もて緊縛られつ。甲板の上にお

轉されしが鳴々として聲を喉下に呑み齒を切りて天を仰
 き。爛々たる猙獰の眼は怒て血を注ぎ。蓬々たる拂亂の髪は
 立て針の如く。只幾度か無念くと叫ひたりしが天賦深沈
 の勇は。幾ばくもなくして其本體に返りけるにや。頓て聲を
 止めて眼を閉ぢ。默然寂然として。少年客氣を悔るもの如
 し。舟行日脚と共に早く。暫時も猶豫せず。今二時を経て。舟を
 大津の岸に繋ぎなば。忽巡査の手に引渡されん。狼籍に及ひ
 しかは。據なく繩を掛けたりとや。報告すらん。掬奴にもやと
 て如何なる詰問と。濡衣とを被るらんよ。濡衣ほすよ
 ありとするも。其郷貫と姓名とを聞正して。手續を経て親
 許に送返さるゝなるべし。親許は何者ぞ。何の故にかかく零
 落しつる。此の少年自身の外に。自身の素姓を知るものあら

されは。其默然寂然たるも。亦何をか考へ何をか思ふを知る
 へからず。
 欄干にもたれて四方の景色に見どれたりし。彼の中年の佳
 人此の騒動を聞いて。見すもがなと思ひながら人の集るまゝ
 に已も亦人々の後の方より窺き見るに。淺増いき少年の打
 擲。一たびは實に掬奴にもやと思ひしが。又思ひ返すよ。や
 ありけん。哀憐の情漸く眉睫の間に溢れて。顔ろむけつゝ去
 もやらず。頓て思切てつかつかと進み寄り。船長の前に會釋
 するに。船長は淡泊なる辭讓にて。船は何時に大津に着ます
 か。どの問なるべしと思ふものゝ如し。人彼方が船長さんで
 ございますか。只今承はれは。アノ人が切符を買はずに乗た
 とか申事で。其でね縛になつたのですか。長左様とふも。彼奴

拘奴かと思はれます。「いかい被方の方では、切符代さへ掛
 ひまいたら。お構はありますまい。賃金は私より立替てやり
 やいよう。へにどふぞ之をれ受取下さい。ッシテ切符をれ貰
 ひ申まいよう。左様ですか。貴嬢かまいなさらんがれ爲で
 しようせ。美「イエ私には私の了簡がございますから宜う
 ございます。ガアノ人はまだ拘奴ども乞食ども。判然せぬも
 のをれ縛りなさるとは如何なものです。其上打擲を。」
 其は…と口籠るを。彼の佳人はかゝる無智の輩を詰るも
 詮なしとや思ひけん。別に深くも其罪を責めず。疾々と急か
 して少年の縛を解かめつゝ。自ら乞食少年の手を取り問
 思むるにぞ。乗客一同呆れ果て。楚々たる佳人の襟はいき。
 少年を助くるさへあるに彼の清けなる手もて乞食を勢ふる

どは。扱も好事の美人かな。乞食ころは如何なる月日の下に
 生れて。かくは榮ある出来事に遇ひいどとて。先に爪弾きせ
 々に似す。今は却て之を羨むもあり。少年は此の慈仁なる俠
 女の救護に遇ふて。夢かどはかり嬉しくも亦訝かしく。彼の
 人何者なれば。我を救ひけんやと思ふ物から。只あまたいび
 首を叩いて恩を謝するのみ。暫し言葉もなかりしが。婦人は
 手を取て上等室に伴ひ。まづ少年の來歴を問ふに。少年其言
 語風采の賤しからざるを見て。尋常婦人に非ざるを知り。且
 は一期の恩人なれば。身の隠さんやうもなく。破れ一重の
 襟かき合せつゝ。一片の熱涙を。悟られまうと咳にまぎらう。
 徐かに語り出るには。

玉陽明か驚愕の詩に危機斷我前猛虎尾我後倒崖落我左絶
 壑臨我右我足復荆棘雨雪更紛驟とかや人の此世に生るゝ
 や心志を苦しめ體膚を勞し左右より起れる艱難に當り前
 後より攻むる辛苦を忍ひかねてはあらぬ心をも起し果は
 天を尤め人を怨みて道ならぬ道に迷ひ入るもの妙からず
 去ればかゝる境界に臨みても亂れす屈せず陽明の詩に遊
 然思古人無悶聊自有と云へる如きものをころ世の大丈夫
 とは云ふべけれ浮世は手踊の舞臺に非ざるなり人間は飽
 賣の人形に非ざるなり變遷推移の浮世に在りて活潑々地
 の事業に當らんとせば心膽を此の沸騰せる世界の鼎中に
 煮鍊せざる可らず人皆食ひ且衣るといへども能く飲の味

を知るものは嘗て一たび飢に沈みし者なり能く衣の煖を
 知るものは嘗て一たび凍に苦しみしものなり千金の子は
 三百六十日絶へず食ふて絶へず衣たりとも彼の味と煖と
 を知らず味と煖とを知るものに非ざれば曷ぞ天下を支配
 するを得んや却説信濃國西筑摩郡といへるは往時木曾谷
 と総稱するものにして山又山の打續ける中に溪間多く人
 家處々に散在せり山には御岳駒岳東西に聳ち夏猶白雪を
 頂きて雲表に巍然たり之に續ける山脈は逶迤として二十
 餘里に波り或は高く或は低く老檜古杉鬱々として千年の
 翠を蓄へ熊鹿多く其中に住居せり道路險惡にして風氣通
 せず壺中の別天地に均しければ人民僞を知らずして風俗
 太古の備あり彼の壽永の昔雄名を四海に轟かしたる旭將

軍の故墟は宮の腰村といへる處の東にあり。里人呼んで宮原と云ふ。其下なる德音禪寺は義仲公の菩提所に於て。壯嚴昔日の如くならずといへども。里人の舊徳を思ふものあるにや。香火今に至りて絶へず。巴か淵山吹山は其北に在り。二妾の住居しける處とかや。樋口今井か館の跡は。其東なりと云傳ふれども。世の移れるに從ふて田地開けたり。かば。今は何處と知るよしもなく。其間を流るゝは。名に負ふ木曾川の急流にして。瀬をはやみ流るゝ水音酒々たり。當時栗殼山の大戰より。遂に敵を西海に追落したる。強將勇卒の故里なれば。山の姿水の流れ。千歳の下自から其威風を思はしむ此の宮の腰村に千村半大夫とて。數代庄官を務むるものあり。木曾の舊家に於て。庶人の思淺からされは。維新の後も戸長

となりて。一村の政を司り何れ自由なく世を送れるが半太夫の妻をれしひと呼ひては。や四十の坂を越へかとも。猶家を繼ぐべき子なければ夫婦の悲一方ならず此上は神佛を頼むの外詮なしとて。夫婦諸共に朝夕德音禪寺に詣で。義仲宣公の木位を拜して。只管一子を賜へか。と祈願なせり。或日夫婦は例の如く。祈願を終りて。方丈に至り。鈍菴和尚に見へて。法話を聞き。日も早西に春かんとする比。いざ罷らんとて。暇を告げ。家路をさして。歸りけるか。宮の腰橋を渡ること。頻りに赤子の啼聲聞へし。か。合點ゆかず。後を見返り。又其處此處と見廻せども。人影なければ。彌怪しみ橋を渡りて。聲をうるべに。草搔分て尋ぬるに。路の邊に從五位下山村伊勢守が建たる。木曾宣公舊里碑の下に。襤褸に包みて棄たる赤

子あり。其傍に一木の鎌落散れり。生れて程へとも覺へぬに。何者の子にやと取上れば。水子ながら眼只ならざる男子なり。半太夫はれしひに向ひ。吾配下の貧民逆も。子を棄つるほどの者はなきに是は。何者の仕業にや。我等夫婦德音寺詣の歸るさ。宣公の石碑の下にて。此子を拾ひし事察するに。夫婦の誠を感應まゝ取て養へよとの神勅なるべし。あら難有と小踊なせば。妻も共によるこびて實に神より夫婦に授かる子。此と取て懐に抱抱けは。不思議や泣も止まり。か

は。夫婦の喜諭へんに物なく石碑に向て三拜なす。又德音寺を伏拜みて。いろく我家へ歸りけり。著者熟々惟みるに。昔より神に祈りて授かる子。若くは棄子の奇異を説くは。皆其成長を神にせん爲也。去れど是は附會にして探るに足らず。

此の宣公碑下の棄兒は。何者の事業と尋ぬるに。宮の腰より三里隔て。敷原宿といへるは。山中の一寒驛なるが。古來よりの習慣にて。毎年七月中旬に。肩組祭と唱ふるものあり。此日は鎮守の祭なれば。貴賤老若打交り。男女互に肩を組み。足拍子を揃へ隊伍を成し。夜更るまで市中を踊り廻るなり。遠くて近きは男女の情。まゝてや年少き男女の手を握り肩を組み。深更の舞踊なれば。果は禮を亂すを制すべからず。去れは此處の途の流行歌に。木曾の習か敷原宿は。婿を取すに孫を抱くといへる如く。私生の子を擧るもの極めて多し。此地の間屋何某の娘は。尙に希なる二八の花。吹かは靡かん風情なるが。去年の肩組祭に。肩組合せし相縁の男は。賤いき馬士家業。踏み迷ふたる戀の悶。悶の迷を明處へ。出さねばならぬ

腹の種。流石身分釣合はねば世間を憚り生み子子を。宮腰に
 棄たるなりけり。元來私生の子は。相思相愛の両情。鈍て一箇
 の肉塊を成すものなれば。間々偉人物を出すことありとい
 へり。果して然るや否や。
 かくて千村半太夫夫婦は。拾ひ子を我子の如く。鍾愛大方
 ならず。傍に鎌の棄ありか。は。名を鎌太郎と名け。掌中の珠
 簪の花といつくしめり。日行き月走りて。鎌太郎早六歳にも
 なり。い。に。ぞ。今は學校へも通ふて。讀書算筆の道をも習はせ。
 父が箕裘を繼かせんもの。其より日毎に村校に上らせた
 り。が。鎌太郎は其性質。痴鈍にして。讀書を好まず。去とて竹
 馬石投。小共の游戲を好むに非ず。只。黙々として。思に沈む
 が如く。憂あるもの。如く。家に在る日も。友戀ふる事もなく。

父母の居間に坐して。怡も石佛の如く。嘗て笑ひ興すること
 あらず。學校の試験毎に。いつも末座に在り。如何に罵り辱む
 れども。恬として耳にも入れず。同一年比の小共に。打擲さる
 れども。只。横目にて振返るのみ。争はんとする景色もなし。父
 母も。始の程は。病氣にもやと案せしが。後には。其痴鈍なるを
 知り。淺増しくも悲しく。一村の戸長をも務むる者の子とし
 て。小前の百姓。夫役の悴にも劣りて。愚なる事。如何なる前世
 の因果ぞと。朝な夕なに言出で。泣かぬ日。逆はなかりけり。去
 れど。鎌太郎は。耻る色もなけれは。悲む体も見へず。村校に上
 りては。筆を手にたに觸れず。家に歸りては。終日。黙々たり。母
 れ。ヒ。ひ。は。女。の。心。狭。く。鎌太郎の村人に笑ひさげすまるゝを
 苦に病みて。病の床に打臥せしが。其。儘。枕も上らず。鎌太郎が

三十四
十歳の春。五十一年を一期とし。返らぬ旅に赴けり。人間最大の悲は。父母の死に在りといへども。喜樂を知らぬ鎌太郎は。易ろ人に悲哀あるを知らん。母の死を見ても。猶黙然として石佛に異ならず。父半太夫は。淺増いき事に思ひつゝ。きのふと過ぎ。けふと暮し。只管鎌太郎が。智恵發達を祈りけり。其後程。經て村人共の。一村を治め。玉ふ御身の内方なくては。都合ならんとて。強て勸むるを。辭みかね。心ならずも。後妻を娶りけるに。幾ほどもなくして。男の子を擧げたり。半百に及びて。實子を得たる半太夫が。喜びは。拙き筆に云ひ難し。うも此より。鎌太郎が。身ほ如何に。變りゆくよの。習どて。水の流ど人の身の。く。

第四回 老僧

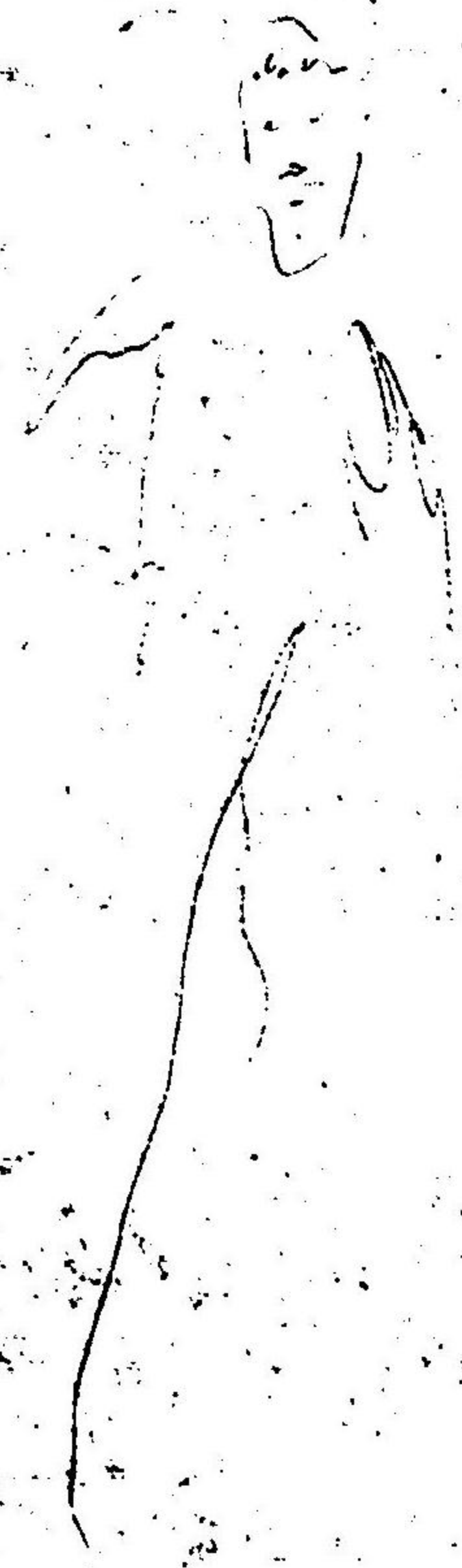
古來數多の小説家は。其著書より得たる報酬の幾分を分て。世の繼母に贈るの義務あるべし。如何となれば。繼母の繼子いしめを。材料として。組立たる談柄は。小説中に於て。往々世評を博したればなり。繼母といへば。逆。総じて。繼子を憎むと定まりしに。非ざれども。まよいき中の母子に。親密なるもの。妙きは。掩ふべからざるの事實なるべし。誰彼を言はず。人の心ほと。鬼々々。きはあらじ。まよいて。人情の變するを。積極の愛は。消極の憎となり。其間天地も。只ならざるの隔をなすに至る。恐るべし。此に。千村半太夫は。鎌太郎の痴鈍なるを。憫み。實子の如く。愛みしが。後妻の腹に。男子を得て。より。愛情薄く。薄くして。其愚昧を。疎ましく。思ひ。日比の情に。引かへて。時ど

しては打擲に及ぶ事さへあり去れど愚なる身にあらねば。
 其便なきを憫みて追出んとまではせず。後妻たりんは繼ぎ
 き中と云ひ我實子を跡目にせんと思へば。鎌太郎を憎む事
 一方ならず。箸の上下にも目に角立て。聊の過を見付ても馬
 鹿よ阿房と責罵り又は終日物くへよとも言はぬ日さへあ
 り。近所のものも今は其不憫を見兼て。繼母の見ぬ處にては
 食物など與へていたはる程なり。が。鎌太郎はかく辛苦の
 境に沈みても猶ういともつらいと。浮世の心はあらさり
 ける。

或日鎌太郎は山男に従ふて後の山に標せしが。不圖同伴の
 男を見失ひ。只足に任せて山路をたどり行くに。年古りし。槍
 は。森々鬱々として。晝猶暗く。溪間水音は滔々として。渡り



いなんと言ふ計なし。山の高さは測るへからず。谷の深さは知るへからず。今は路にも陥迷ふて。一條の樵路だにもなし。千丈の梢にひいく。猿の聲を乘にたどり行くに。山より山にかけたる岩橋の道も絶へたる巖に出けり。日は已に西山に没して。飛鳥時に歸り。月未だ東山に登らずして。四望蒼然たり。臆病の者ならんには。心亂れて足痺れ。一步も引出す能はざるべきも。元來喜懼の情に淡き鎌太郎なれば。怖ろしと思ふ事もなく。葛を傳ひ藨を攀ち。辛ふして山の半まで下り。見れば前面の林より隠々たる燈の影。星の如く豆の如く。或は明かに或は滅へ。心細げに木の間を洩るゝは。狐狸の住家にや。人の住居すべくはなけれど。も。夜路に迷ふて燈影を認めず。は。飢て食を得たるに均しく。兎角の思案する間もなく。火



閉しもやらず。破垣結めぐらせし中に。疎なる軒端は月を洩すへく。庭に生ふる松か枝は。年古りて雲を宿するに足れり。何者の住居にやあらん奥床し。鎌太郎は足を岩根に踏折き。袖を樹の枝に掛裂き。やうくに人家を尋ね得ていと喜ばしく。門口より大聲にて。我は山路に踏み迷ふて。家路を忘れしものなり。宮の腰へは何處の路を取るへきや。教へよかんと呼はれは。其は何とか云ふ。山路に迷ひいとぞ。定めて難儀ならんとて。内より立出たるを見るに。年の比七八十とも覺し。き老僧なり。霜の眉長ふして道骨秀で。雪の鬢垂れて仙風高し。身には細衣を着て。手に念珠を持ちけるが。曲み障子を推開き。此へくと打招くに。鎌太郎は怖るゝ体なく。つかくと進

み寄り。會釋もなさて顔打守るを。老僧つくくと見て打撞き。汝は宮の腰なる千村半太夫の粹鎌太郎ならずや。予は德音寺に在りつる鈍翁なるぞ。近比住職を弟子に譲りかく山中に隠居して。浮世の外に選れたり。何は然れ内に入りて。休ふべしと言れる儘に。後逸に就て居。爐裡の傍に坐を占めけり。佛間を照す燈の光は。大恩教主の秋の月に擬へ。香爐に焼く烟の行衛は。生死長夜の夢を示す。柱に拂子を掛け。經机の傍に如意を置けり。三間の佛屋能く大千の世界を藏め。一卷の心經能く百八の煩惱を脱す。梢の落葉溪の水音。齒かに菴に音づるのみ。寂寥として別に天地の人間に非ざるが如し。鈍庵和尚は兼て思ふよゝやありけん。鎌太郎に粥すゝらせて。頓て之を釋迦牟尼尊像の前に誘ひ一炷の香を焼て。心經を

繰返しく、誦し終り。如意を取て容を正し、鎌太郎に向て云ふやう。汝幼きより愚鈍にして、物の道理を知らず。人に罵られて耻る事なく、人に撲れて争ふ事なく。人物を與ふるも喜はず。母の死に遇ふて悲ます殆んど天性の痴兒に似たり。然れども古の人は大器晩成といへり。幼ふして小剛、少ふして愚なるのは狂花の如く、季節に至て實を結ぶなり。少ふして愚なるに似たるもの、長して其厚大の智發達するに及んては、天地を動かすに足るものあり。予れ汝の眼光只ならざるに見所あり。今の愚なるは天賦の厚ふして、發するの遲きものなるべしと思ひ、いかは。いつかは汝が父半太夫に乞受て吾徒弟となさんと思へり。今汝が父の後妻に實子を得、いかは。父母いたく汝を疎むと聞く。是れ時の至れるなり。汝はいまだ知

らざるなるへし。半太夫は汝の實父に非ずして、思あり養ある養育の親なるぞ。今を去る事十三年前。汝が養父母子を宜公の靈に祈り、德音寺より歸るさ。宮腰橋に乘見あり、拾ひ取て家に歸り、養育なせしは、即汝なり。成長するに従ふて、愚鈍家を繼ぐの才なく、殊に實子あるに至りては、汝家を養弟に譲りて、出家遁世なさん事。義と思とに酬ゆるの道なり。抑人の此世に生るゝや、賢愚の別ある所以は、皆其少時の教に在り。孔子の所謂上智下愚を除ては、誰か教へて移らざるものあらん。汝年己に十三に及べり。今より天賦の性を空ふせず。鈍翁か教に従ふて、大智を磨き、佛戒を守りて、天晴名僧智識ともなれよ。かといひさま。何思ひけん如意を揮つて、楯はさまに、鎌太郎の背を打々と打懲すにぞ、鎌太郎は阿と叫び

て轉び臥せしが。漸やくにして息吹返す。超然として夢の覺
 めたるが如く。豁然として悟る所あるもの如く。頓かに容
 を改め禮を正して鈍翁に向ひ。扱もいらさりき小子は業兒
 にして。今の父は義理の親なり。事を愚にも年を経て今日
 に至り。いは悔ひて詮なし。今は只尊師の命に従ひ申さんど。
 言葉爽やかに言出けるは。昨日の痴兒に似もやらず。訝しく
 も亦不思議なり。鈍翁扱ころど打喜ひ。翌る日自ら半太夫許
 へ赴きて。思ふ由の候へは。鎌太郎を賜ひ候はんやと云ふに。
 其愚を疎み。折なれば。容易く肯ひたり。にぞ。鈍翁斜なら
 ず喜ひ。其より鎌太郎を庵に置き。朝夕書を讀せ字を習はす
 るに。其發明尋常ならず。一を開て十を知るの才あり。平日は
 黙々として語らず。只管讀書に餘念なきを。鈍翁の問に答ふ

るに方りては。辨舌滔滔として懸河の如く。彼の黙々の舌能
 く滔々の辨あるは。是も亦非凡なりとて。鈍翁さへも舌を捲
 き。いとぞ。かくて庵に在る事三年餘り。和漢の經史をも累沙
 獵したり。かば。此より初念の如く。髪を切て姿をかへしめ
 んど。其日を卜して待居たり。
 鎌太郎は大鼓の如く。鈍翁之を叩くときは。答ふる事響の物
 に應ずるが如く。といへども。之を打つものなれば。黙々ど
 して痴兒の昔に異ならず。去れば其胸中には。何事をか思ひ
 何事をか望む。遽然として鈍翁さへも其奥を測りがたかり。
 喜怒の情ありや。なやをを知るに苦しめり。薪を鈍翁に贈
 るの里人等は。鎌太郎を見て。あの人にて。も腹空りなば。ひも
 じからんやとまで評するほとなり。或日師の坊の許を得て

一卷の書を懐に一つ、庵を立出で、時しも秋の半に、
 て紅葉も色付く比なれば。小高き丘に登らば、やと思ひ、機徑
 を傳ふて木曾川を渡り、宮の腰の西屹然たる一峯に登れり。
 抑此處は名を烽火嶺と呼びて、往時木曾殿の支城なり。斥候
 を此峯に置き、烽火を擧げて急を告ぐるが故に、かくは名け
 し。どなん後は駒ヶ岳の山脈に連り、前に福島の城山を望み。
 水精山、明星岩、或は研犬か谷、斬蛇の潭等、皆其左右に在り。蒼
 々たる山の容、沿々たる水の姿、皆一眸の中に集り、かば、鎌
 太郎は、いはば、黙然として、左を顧み、右を望み、形勝の壯なる
 を嘆じて、古詩を朗吟、いつ、去もやらす。荒烟蔓草の上、に傍
 徑せ、いが、忽ち、喟然として、手に持てる、一卷の書を、落取せ、
 を拾ひ上げ

誦掛の史記を持たま、遊歩に出掛けたが、どふも歴史は
 を面白く、旭將軍の四天王、其比は女までも世につれて。
 勇氣であつたものと見へ。巴御前と云ひ、アノ邊がもと
 木曾殿の城跡でもあろうか。其處の森の中が、中三權守の
 邸跡か、いらん、此風景を見て、も、壽永の昔、白旗推立て、此山
 を出軍になつた時の勢を思ひ、やらる、栗殼谷から平家
 を追落し、都の中に白旗を第一番に立てたのは、彼處に居
 つた人だ、彼處の森の中で成長られた人だ、其比は二十餘
 里四方の木曾山中より、數限も、いれぬ剛のものが出たの
 は、不思議なものだ、矢張、山水の氣をうくる事があるのか
 も、いれぬ、い、か、其ならは、今日になつても、英雄豪傑が

一人ても出ろふなものが。今では今井四郎の草履取に
なるほどの人間も出ないのは。時世がわるいといふでも
あるまいが。何分氣象の寐入て居るのは。残念な事だ。我
ろは木曾山中の豪傑だと名乗て。旭將軍の面を汚さぬ人
間が出て呉れねば。木曾川に面目ない大坂合戦時分でも。
山村甚兵衛と云ふ人は。一族を率ひて此東山道を食ひ止
めたと云ふ事で。己の養父の千村の先祖も。其一人だと聞
て居る。其比までは人物があつたと見へるが。今日は早無
人の山中だ。一片白旗始出山天下震驚。朝日か。天下を
震驚させた。いものだ。ナ。ケレとも。今日の世では。けふ
んだ。史記の陳勝吳廣も仕様がな。漢の高祖も七十餘戰
の力を致す處がない。蘇秦と云ふ奴も。面白い男だ。舌先三

寸で天下を取るとは。不敵な男だ。流石の張儀に。蘇君之時
儀復何言とまで言はせたのは。愉快だ。今世間で威張て居
る小僧等に。木曾の千村鎌太郎が時。我々復た何をか言ん
と。閉口させた。いものだ。ヨシ。奮發すべし。今日の世は
蘇秦だ。蘇秦世界だ。云つた處が。矢張三年の揣摩を。蘇
な。ければ。い。かん。三年の揣摩。三年の揣摩。成程蘇秦の
時代では。洛陽で失敗して。亂で勉強するも。よからふが。今
日では。どふしても。上國で。勉強するも。よからふが。今
シ。都人士の爲に。落魄を笑はるゝとも。六國の相印を握
られぬ事はあるまい。此から如何なる苦酸を嘗むるとも。
都に出て。揣摩を凝す。としよう。トハ。云ふ物の和尙さまの
恩。い。か。い。浮々として居ると。坊主に。されては。たまらない

不立文字の禪寺の坊主は、石地藏でもつとまる話だ。死んだものも同様だ。人間に生れて坐禪で一生涯を送れるものでない。いかし此事を尊師に告げた處が、中々許されはまい。ト云て出奔しては恩を仇だ。これは考へものだぞ。チア一ニ事を分けて頼んだら、和尚さまも無理に止られる事もあるまい。いつら打明けて云ふ方がよからふ。遠く寒山に登れば石徑斜なり。白雲生ずる處人家あり。と聲期かに一詩を吟い。悠々として山を下り、不敵の振舞。果して阿房子息に非さりけり。

第五回 乞巧

かくて其日は草庵に歸りけるか。間敷もあらぬ庵の中。いつも師弟膝を組んで學問の物語に夜を深す。日比沉着の鎌太郎が、此夜に限りて何となく浮々するを見て取る。鈍翁怪しき素振と鎌太郎に何となく尋ぬれば、流石は師の坊の聰明に氣を吞れて言兼すが、心を決せし上からは言はで果つへきに非されば、思立つ由云々と物語り。一人出家して九族天に升るとは云へ。只一人の義父のみにして、父母の出處もいれぬ。某此儘に朽果ん事返すくも、残念なれば、佛に事ゆるの信心を移して、天晴名を天下に擧げ、世益をなす度存念なれば、身の暇を賜りて、心の儘にさせ玉は、御恩は死すとも忘れじと思ひ込んだる、跡なれば、鈍翁眉を蹙めて打案

し。我彼を致ゆるに。經を先にせずして歴史を先にせしは。彼
が功名心を養ふ本どころなりにつれ。今となつてはせひも
なし。沉默の鎌太郎かく決心せし上からは。止むるもよも
止まらじ。思業を定めて打肯き。三軍の帥を奪ふも。匹夫の
心は奪ひ難しとかや。我も決して止めはせし。去なから都門
に入て學資は如何にと詰り玉へは。鎌太郎は莞爾とし。案し
玉ふな尊師。小子存する旨あれは。假令火の中水の中に入る
とも氣を屈し志を挫く事は候はずと云ふに。鉦翁頻に嗟嘆
なし。我れ隱居の身にあらすば。汝の學資を給する難からね
ども。如何せん。今は老翁の身なり。實に山中鹿之助も。七難八
苦を嘗めずは人となる能はずといへり。去れど少年血氣の
勇を慎めよなと細々と教訓し。せめて是を旅用とせよとて

佛檀より金十圓を取出して與ふれば。鎌太郎其思に感し。只
拜謝するのみ言葉もなし。翌日朝まだきに師の坊に暇乞し
つ。いさく旅を信濃路や木曾の山家を立出て都の花を
美濃路へと足にまかせて急ぎけり。
爰に信濃と美濃との境界にして。十曲峰と稱する山あり。山
は左まで深からねども。人家疎にして往來稀に。坂いと險ふ
いて。九十九折なれば名に呼びなせり。路を挟む松林一里餘
も打續き。日暮に及ひては行人いと少し。近きころ此處に異
形の賊徘徊して。旅人を脅やかす由里人言ふらせしかば。さ
らでも凄しき山路の夜は通行絶てなしとぞ。鎌太郎は心の
願叶ひしかば。喜しさ言ん方なく。只管路を急ぎつ。二日目の
夕方には。早妻籠の宿に着たりしが。今より二里ゆきて馬

龍の驛に宿らんと。路を貪りて山路に掛りしに。半程も來つ
 る比はや日は至く暮れ果てし。舊曆十月十日の月は山の端
 に上り。木の間に洩る光り路を照せは夜路も亦面白しと大
 膽不敵の鎌太郎。獨り詩など吟しつゝ。やうやくにして馬籠
 に着たりしは十時過る比なりき。いさ泊らんと宿やを叩く
 に夜深けての獨旅は物騒なれば。斷りと幾軒ゆきても同
 様なれば。又も二里ゆきて落合に泊らんものど。再び杖を山
 路に引くにやがて名に負ふ十曲峰にかゝりけり。月皎々
 として。濃州の山を照らし。松風の音颯々として。獨り律呂を
 弄ぶ。路の傍に長野縣。岐阜縣。管轄境の標木ある處に至り。仰
 て落合までの里程を讀む。うち何ぞ圖らん。標木の後なる老
 樹の蔭に人あらんとは。丈なる黒髮振亂したる。色白き女の

身に白無垢を着て。手に持てる。一刀引抜き。鎌太郎の前に立
 塞り。路用を渡せと脅すにぞ。鎌太郎はヒシとせす。聞けは
 聲音は男にして。形は女と装ふ。曲物。悪き彼奴の仕業かな。懲
 して呉れんとは思ひしか。彼れ凶器を携ふるを。迂濶に手出
 さば。千金の身を危ふせんと。業と驚く。跡に持ない命は助け
 玉はれよと。懷中取出し。與ふれば。刀を納め。取らんとする。油
 斷を見すか。丁と蹴る。蹴られて。彼奴も去ものひるまばこ
 ろ。無圖と引組み。揉合ふたり。鎌太郎も木曾山育ち。樵業をも
 なしたれは。骨格逞ましく。力強く。暫しは負けしと。推合しか
 と。年猶少く。旅には疲れたり。ひるむ處を一當あてし。其儘。賊
 は逃去れり。程經て。鎌太郎我に返り見れば。師より賜ひし。旅
 用の金も。着換の衣も。あらざるにぞ。南無三寶と思へども。何

地行けん影たに見へねは。追付んにも的はな。茫然として
 居たり。が。日比沈着の氣象なれば。つらく思ひめぐらすや
 う。我強て暇を乞ふて師に辭せしに。菴を出で。いま三日
 ならず。旅用を失ふたれば。どの面目あつてか師に見へ
 ん。一旦誓ひし吾志。岩をもなぞか徹さるべき。よく此上
 は人の門に立つとも。一たび京師にたどりつかば。又詮術も
 なからずや。是は。兎にも角にも。今番の宿を急がんと。險き坂
 を飛ひ下り。釜が橋をも渡りて。落合驛に着たり。が。夜は已
 に五更を過たり。宿を起すも心苦し。直に巡査派出所に至
 り。事云々ど訴ゆれば。素破どて其旨本署に通知し。逮捕の用
 意厳なりといへども。日を経て賊の行衛は。知れざりけると
 う。其夜鎌太郎は。巡査の案内にて宿を求めしも。翌日宿料あ

らざれば。着たる羽織を賣代なり。宿に拂ひし。殘金を受取り
 て。中津川に立出で。其より京都街道に志させし。が。彼の十曲
 峰は。國と國との境のみならず。人情も亦此山一つにて。天地
 雲泥の懸隔あり。木曾山中は。朴野にして。偽を知らず。美濃中
 津川以西は。輕薄にして。都めけり去れば。鎌太郎の旅行は。困
 難に困難を重ね。羽織も。錢をも。失ひて。今は。重ねし。裕をも。脱
 ぎ。一重一枚となりたり。が。豪邁不撓の性なれば。飢寒をう
 し。ども思はねども。道路橋梁の路錢に至ては。拂はされは。行
 く。事叶はず。橋番渡守に情を乞へども。聞入る。跡あらされは。
 路の小蔭に日を暮し。夜深て橋番の眠りし。比に。拔足なして
 橋を過ぎ。小屋の影に臥すもあり。又は。太田の波。其外渡船の
 場にては。衣物を脱ぎ。頭に戴き。徒渉せんと。試みしに。乗客

其を危みて助け乗せし事もありけり。庵に在りしとき。聊か
 經よむ事を知りしかは。其を幸に門に立ち。經文を拾讀して
 人の情をたのむに或は罵り懲すもあり又は見向だにせず
 いて無用と追返すもあり。慈悲深きものゝ情にて。一文二文
 を貰ひ得るも日に二錢にも足らざれば。燒芋一本を太半の
 珍味となす。半串の團子をもちて。一日の飢を忍びけり。中には
 其年少ふして。珠勝にも讀經なすを憐み。握飯して與へしも
 あり之を得て再ひ人間の心地せしも無理ならず。日暮れて
 林の中に地藏堂を認めては。天國に上りし如く思ふも憐な
 り。或日門邊に立て經讀けるに豆腐のからを與へしかば。此
 儘にては食べ難し。鹽を少し賜ひてよと云ひけるに。賢澤な
 る乞食よとて。唾を其面に吐きかけしとぞ。凡そ人間界に有

と有ゆる。艱難辛苦を嘗め盡して。近江國長濱までたどり着
 たりしが。此日は一文の貰さへなく。飢へて凍へて歩む事も
 叶はねば。後の難儀をも願みず。水夫の目を掠めて。漁船に乗
 り込み。客室の隅にかくれ居たり。此の千村鎌太郎ころ。彼の
 水夫に打擲されたる少年なりしとは。其婦人に物語れる口
 頭にてぞしられける。も此傑女は果して何者なるぞ。其素
 性を知らほしくば。忍ひて下文をよみねかし。

抑桓武天皇平安城を興基ありより以來歴代の聖主徳を履み仁を行ひ玉ふ事千有餘年大號の出所弘化の本く所にいて其繁榮れさく筆に述ふべからず紅閣翠甍軒を並べ棟を列ね帘影叙光空に翻り街に満てり春に地主の花にあこがれ夏は四條河原の夕涼み秋は嵐山に紅葉狩りて瓢を叩いて返るを忘れ冬は東山に雪を稱して時ならぬ花吹雪に酔ひ絃管の聲は櫻院として行雲を過め舞踊の影は櫻橋として飛鶴を學ぶ神社佛閣盡く壯嚴を極め山姿水態皆明眉を争ひ名所古蹟東西南北に多く左思が都賦に云へる所も此にまさるべくもあらず去れば古より四方の名士俊豪及び文人墨客に至るまで一たび京都に游んで其繁華壯麗を

見ざるものなし。明治遷都の後はやゝ春草生じて池館遊るの趣なきにあらずといへども風月烟花猶舊京の面目あり殊に地靜にして人優しく風俗自ら都雅にして物光も亦和麗なれば山陽翁か京華に老ひなんと言ひし如く風流高節の士浮世の塵を厭ふものは皆筆を擲へて閑居を卜し生徒を集めて古道を講ずるもあり往々閨閣の秀敷島の道を尋ねて月の色虫の音に心をはこぶもあり詩仙堂に游んで丈山の高風を想ひ嵯峨にうろ歩行して小督の情をしのび鹿ヶ谷談合ヶ谷の清水を掬ひては修寛山莊の昔を思出て或は松虫鈴虫の古墳を訪ひ或は永觀堂若王子の紅楓を觀る四時の移り換る毎に月に吟いて風に嘯ぶく浮世の人の知らざる樂多しとかぞ。

爰に洛東清水谷の片邊に閑栖を卜し。母子二人に下女をも
召使ひ女子を集めて文學を教授するものあり。母を春田紅
樹女史と呼びて。今年五十に近く。娘を花子と云ひて。年已に
二十四。姿態楚楚々として人を動すのみならず。心ばへいとめ
でたく。殊に手跡美事にして。歌道にも通じたれば。母子にて
教授を業とせしが。此春田花子ころは。彼の舟中にて。少年を
救ひたる美人にぞありける。今其素性を尋ぬるに。父はもと
北國の某藩士にして。物頭をも勤めたりし。春田新左衛門平
秋種とて。世に名を知られたる武士なり。橋本左内頼三樹等
と交深く。常に勤王の志を抱き。夷虜の跋扈を憤り。屢藩主に
建議する所ありし。かども。過激なりとて。用ひられず。當時藩
論二派に分れ。一は春田秋種等の唱導する所にして。勤王黨

と云ひ。一を俗論黨とて。首尾兩端を持し。因循決する所なき
ものを指せり。兩派議論相合はずして。動もすれば兄弟相闘
くの勢なりし。か殊に俗論黨の勤王家を憎む事大方ならず。
秋種等を目して輕躁國を誤るの徒なりとし。其京邸に祓役
するに及んで。雨に乗じて之を四條橋邊に暗殺せり。嗚呼痛
ましくひかな。春田秋種は。心を王室に致して。俗士の爲に殺さ
る。積年の忠誠一朝水泡に歸し。剩さへ藩制に因て知行を没
收せられ。春田家斷絶に及びたり。其妻紅樹女史は名をたさ
だと呼びて。年二十六。娘花子は生れて二歳なりけるが。尋常
の婦人ならんには。蒼皇狼狽途方に暮れて。消入るばかり打
嘆くべきも。もとより男々しき性質にして。夫の氣質をも受
得けん。少しも亂る跡なく。心靜に花子を抱て。里方に歸り。實

六十一
父に寄食してまた兩夫に見へず。只管花子の成人を樂しむ
は。天晴なる烈女なりけり。宜なる哉。其母殿夏山翠軒先生
は。一藩の督學にして。嘗て藩命に因て江戸昌平學に學び。學
問淵博。識見超卓。殊に文章を能く。常に氣節を尚びたり。
かは。子弟を教ゆるに。一に正義大道を以。秋毫も義に背く
あるを見れば。面色勃如として怒り。暫らくにして涙潸々ど
して下り。之に繼くに叮嚀親切の説諭を以するが故に。夕に
其門に入るものは。朝に其徳に化せり。とぞ。先生學問を以て
世に立つといへども。敢て迂儒を以て居らず。其阜平に在る一
を。常に大刀を横たへ。窄袴を穿ち。講經の暇。糧を裏んで近郊
を逍遙し。遠足を試みて曰。當世の書生能く書を讀み。能く文
を属するも。顔色蒼々として文字の間に生死するもののみ。

一朝事あり。日に十里を行かば。氣息奄々たらんと。嘗て山陽
の印に身横一劍。答君恩の字あるを見て。咄蕩漢巧文君を欺
く。狡儒憎むべし。とて。終身其文を讀まざり。とぞ。なん。其氣概
の人。に異なる。如此翠軒文集に載する所の。岡相如論を讀む
に。其壁を完ふして。歸るを稱せず。とて。廉將軍を避くるを稱
し。戰國間第一流の人傑となす。是に因て之を見れば。先生徒
らに。霸氣人を凌ぐものに非ざりけり。去れば女史少ふして
學を。殿父に受け養ふ所。學ふ所。殆んど世の所謂儒者輩の及
ふ所に非ず。詩歌をさへに巧に作りなせしが。素より柔順貞
淑の性なれば。露ほども人に誇らざりしにぞ。夫秋種さへも
女史が學問の深きを知らざりしとぞ。女史家の不詳に遇ふ
て。より。閑室に閉籠りて人に見へず。只良人が遺子の人とな

りて賢婿を擇み。再び亡家を興さん事をのみ祈りつゝあり
 が。大勢の趨く所俗人支ふ可らず。大義の有る所庸人其れ
 之を奈何せん。維新の際に當り。時論一定。薰蕕判然たり。が
 は。藩主秋種の忠誠を思ひ。舊録を遺族に賜ひ。再興を許させ
 玉ひ。にぞ女史の喜ひ言ふへからず。順て王政古に復し。世
 は。靜謐となりけるが。翠軒先生も今は世を辭し。子息の代と
 なり。しかば。女史は思ふ由の候へばとて。故郷を辭して京都
 に出。て今の清水谷に閑居して。風月を友とし。女生徒を教授
 して。花子の成長を樂しみけり。
 待つは一時も。ううつら。過越し。月日を數ふれば。實に隙ゆ
 く。駒も。只ならず。紅樹女史は。秋種ぬしに別れ。悲しみも。昨
 日の如くなれど。數ふれば。花子も。早十一二三となれり。も。



死者の再び生るゝものならんには。我良人花子の成人を見
玉ひて。如何に嬉しく思ひ玉はんは。只花子が涼げなる眼
の中に。亡人の像残れるのみ。わが是までの苦節を告ぐべき
人もなし。此上は天晴夏山翠軒の孫にして。春田秋種の女な
りと言ふやう。教育せんころ草葉の蔭の貞節なりとて。
此までわか膝下にてのみ教へしを。日毎に冬原雪子の門に
通はせ。和學の講義を聞き。或は敷嶋の大和言の葉つらぬる
道をも習ひ。歸りては母女子の前に侍りて。數多の女生徒と
も。和漢歴史の話を聞き。寸時も懈らず勉學なせしかは。
十七八に及ひし比は。畧經史に通じ。文學の道にも委しく。殊
に歌は香川の流をくめる雪子の指南に因りて。天晴いみじう
上達しけり。其より女史は花子の乞ふまゝに。同志社の女子

部に通學せしめ、異國の文をも學ばせしが、固より慧敏の花
子なれば、三年ばかりにして其學にも通じけり。今は女史も
年老ひて、生徒の世話も届きかぬれば、とて、教授を花子にま
かせ、女史は折々一二席の講釋をなすのみ。身は書齋に在り
て、四方より乞求めたる色紙短冊などを認め、世を風流に送り
けり。

今は花子の人となりを示すの時期に迫れり。其容良風采は、
舟中の人々見て之を知れり。其學術は前文に説出せり。只其
天性と其希望とを云はんのみ。天性と希望とは、花子を玉成
する所以なり。予此に言んと欲して、又躊躇する所以のもの
あり。何ぞや言はし世の女流の嬌怒を蒙るべし。言はされは
花子に反映するものなり。よしや女流に怒らるべしとも畏る

苦藥の爲に病者の忌を辭せんや、子れ敢て女子を以て男子
に比して、不完全の動物となし。其高等教育を非難するもの
に非されども、如何せん女子の學問するものは、往々浮躁の
病、偃放の過を免れざるの事實を掩ひがたきを、女は心狭し
とは、數千年來傳へ來りし諺なり。世人の過半数は之を以て
千古の極言となせり。開けぬ世の言ならはしなれば、とて、頗
に之を排付し得へからず如何となれば、數千年來の婦人か。
此の格言に洩たるもの少なければ、なり去れば、女子の學問
するもの、些少の智識を鼻に掛け、人の揚足を取り、己のみ賢
けに振舞ふて、果は人を人とも思はぬものなきに非ず。言は
てもよきに輕々しく口出して、心得顔なすは何ぞ、裏長屋の
鐵棒引に異ならん。予か知れる女生徒の、聊か英語をも學び

たるものあり。其人旅に出づるに。折しも親族の某も其地に
來合せ女生徒の來れるを聞て。人もて追付けた目に掛らん
と言せつるに。女生徒は如何なる人ぞと問ふ。何某とて汚
き風俗の人なれど。畫の上手なりと云ふ。女生徒どのは其誰
たるを知れど。左様の人に悪意はなし。誰なるらんとて頗て
逢て扱は御身にてはせいかと云ふ。何某は餘の挨拶に呆
れ果て御身とは親類の畫師何某と云は。疏はなかるべき
に。恨めは。女生徒どのはぬからぬ顔にて。御身名を世に知
られ。いにも非ず。名をのみ聞て分るものかはと言ひ。とな
ん道理は去事ながら。日比の振舞推測らるゝとて。何某の子
に物語事あり。輕薄の風天下を卷去り。今日にて。花子の
みは然らず。身儒家に生れて。文學に通し。和歌に妙に。壁の横

文字をも學びて。二代の女學士たるに恥ぢされども。日比陳
遜に。いて女の道を辨へ。柔和順淑。人の前にては物をも言得
ぬやうに。見ゆれど。女生徒に向て義理を説くには。言葉知ら
かに。して意味分明なり。其教則も禮義を本として。躬行を先
にせし。かば。其門に入るもの自ら靜肅にして。儀容あり。能く
其教に服従せし。に。都中の人一目見て。彼ころは春田の門
人よと稱ゆるほどなりけり。其近き比世に公にせし。吹雪集
といへるは。先太人秋種ぬし。及ひ外祖翠軒翁の歌を校正せ
しものなるが。其端書を見るに。優にやさしく。哀深ふして。心
の誠自ら文字に顯れたり。其外日比作れる和歌多けれど。も
我身の樂にして。世に誇らんと。には非ずとて。篋中に秘めた
けば。世の人知るもの少し。年已に二十を超へて。三つ四つの

指を折しかども猶嫁がん事を急がす。時の大臣高川氏は同里の人なるが。華胃某の内衙に奉職せるものに媒介せんと。いづれども辭して従はず。高等女豊の教諭たらむの内。命ありしかども病と謝して出でず。父の遺産を守りて母に事へ。名聞に走らずして。教授を事とし。安らかに世を送りける。母を子ももに後日に待つもの。如くぞ見へし。この比類。里越前に免れぬ用事ありしかば。花子は母に乞て侍女と共に歸て先人の墓を掃ひ。用を終りて太湖の便船に打乗りけるか。圖らずも千村鎌太郎の危難を救ひけるなり。花子は別に深く宗救を信せされども。只一言の常に生徒に語れるものあり。曰く。汝は汝の如く。汝の隣を愛せよと。

第七 激車

太湖通の船客も。中等下等は其相應の乗手あれど。上等に至ては誠に少なく。長濱より發せしときは。官員体の者三人と。花子の一行のみなりしが。此の三人は彦根にて上陸すると共に引違へて乗込みしは。江州の豪商とも覺しき四十近き男。及び其從者に。小きかかげなる。三十はかりの男二人にて。花子等を合せて都合四人のみなり。花子は鎌太郎の危難を救ひ。上等室に誘ひ來りしに。其身形の餘りに見苦しければ。江州商人は同席を厭ふ如く。從婢のね竹は由なき事を。思ふに似たり。鎌太郎が身の上一部始終途中の艱難まで。包まず語るを聞て。彼の商人主従は頻に何か呟きつゝ。只管威嘆なすが如きは。今更不憚にや憂へけん。又は花子の氣象に

や感^{かん}じけん。お竹は壁^{かべ}をひろめて花子に向^{むか}ひ。
 お竹「お嬢^{ぢやう}さまへあんなに口巧^{くちやう}者^{もの}には申^ますもの、嘘^{うそ}か眞^ま事^{こと}か分^わりません。あはれつほい事を云^いて人を欺^{あざむ}すのはエテ世間^よにある事^{こと}ですから。おたまされなさんよふになさいまし。なんだか氣味^{きみ}のわるい顔付^{かほづ}じやありませんか。うふいできたない。彼方^{あな}いゝ加減^{かげん}に遊^{あそ}ばせ。そゝやアノ人の云^いふ事が嘘^{うそ}で。此方^{こゝ}に災難^{さいなん}でもかゝるよふでは。阿母^{おぼ}さまがどんなに叱^しり遊^{あそ}ばすかゝりません。お竹「なんだ。おたまへめつろくな事^{こと}ない。と。目尻^{めじり}で叱^しられ従^{したが}婢^ひお竹は。其儘^{まま}面^{おもて}ふくらして扣^ひへたり花子は頓^{とん}て鎌太郎^{かまたろう}に向^{むか}ひ。
 お竹「只今^{ただいま}承^{うけたま}わりました。處^{ところ}では大分^{だいぶ}御難儀^{ごなんぎ}をなさいます。たと見^みへますが。いゝか。其もれ若い時^{とき}は御修業^{ごしゆぎやう}の一^{ひと}でと

さいましよう。是^{こゝ}から京^{きやう}で御修業^{ごしゆぎやう}をなさるゝには。あちらに御知^{ごち}人^{にん}でもございますか。いゝ。知^し人も何^{なに}もありません。只^{ただ}私の身^み體^{たい}が私^{わたし}の友人^{ゆうじん}ども私^{わたし}の従^{したが}者^{もの}共^{ども}思^{おも}て居^ゐばかりです。勿^な論^{ろん}國^{くに}より出^でる時^{とき}も學資^{がくし}の出^で處^{ところ}はないので。すから。一身^{いっしん}の力^{りき}役^{やく}をいしてなりとも學問^{がくもん}をする心^{こゝろ}待^{まち}です。一^{ひと}体^{たい}東京^{とうきやう}の方^{かた}へとも思^{おも}ひまゝたければ。聞^きく所^{ところ}では東京^{とうきやう}も書生^{しよせい}を以^{もつ}て充^み満^{まん}して居^ゐろ。随^{したが}て私^{わたし}のようなものも澤山^{たくさん}居^ゐま。よう。シ。スレハどうしても事^{こと}が難^{がた}いと思^{おも}ひまゝたから。土地^{ちち}も靜^{しず}か。人^{ひと}氣^きもゆつくりして居^ゐる京^{きやう}都^との方^{かた}へと志^{こゝろ}ざした譯^{わけ}です。晝^{ひる}は僕^{わが}卒^{そつ}の役^{やく}を取^とるとも夜^よたけ勉^{べん}強^{きやう}をいして。他^た人^{にん}の三^{さん}年^{ねん}で卒^{そつ}業^{ぎやう}するものなら。私^{わたし}は六^む七^{しち}年^{ねん}を費^{つひ}して。つまり人^{ひと}並^{なら}に仕^し送^{くわ}げられぬ事^{こと}はあるまいと思^{おも}ひます。成^なほと御^ご殊^{しゆ}勝^{しょう}な御^ご

志でございませぬ。シテ學問は……成ほそ英學を……うふいで御
 目的は官途ですが。官途……官員ですか……私は官吏になり
 たい事はありません。今日の世は少し學問をするを皆官途
 へと。官途に就く事はかり望て居るよふですが……成ほそ官
 に就けばきまつた月俸にありついで三飯の食いうこない
 はありますまいが考へて見れば意氣地のない話で口腹に
 奉公する爲に。紫服紗の腰弁當をさげるので。吾學ひ得て……
 蓄へ得て居る學術を行ふが爲に。フロッツコートのおケツ
 トへ門鑑を入れるものは少いよふです。即ち職仕者で……云
 はい。店さらいの品物で。たとへ百圓二百圓。或は千圓の價と
 した處が二拾錢の下駄拾錢の袋と同様價のきまつたもの
 です。君子不器と云ふ通り。大人君子は價はないものだらふ

と思ひます。花子「成ほそ高尚なれ説です。左様なら彼方は民間
 の政事家。即世に云ふ自由黨などのよふな事をなさるれ志
 ですか。」「イーエ……私が同村の小學教師が。教師を辭して自
 由黨にならふか。其方が後々の爲に割がよさうふだと云て
 居ました。アノ政事家と云ふものも。一の商賣と見へます。
 私ほそふも……。」「成ほそ……。」「エ……。」「らんならそふ云ふ恩召で
 ずか。少し私の思ふ仔細もありますが。彼方の御希望はとん
 な處に……。」「私の希望……。私の目的……。容易ならぬね……。未
 來の事はどの通にもいへます。うれ丈にいかねば。言ん方
 がよからふと思ひます。うかい。隠然如二敵國と云ふ人物は
 世に少いよふです。
 四五年前の阿房息子。船長に罵られたる乞食。水夫に縛めら

れたる拘奴の千村鎌太郎は。今や阿房に非ず。又果して乞食
 拘奴にも非ざりけり。寥々たる数回の問答辭を費す事多か
 らざれども。彼が志篤く氣盛にして。いかも深沈なる百折不
 撓の剛の者とするに足るべく。其厚重の資質を以て學を艱
 難の中に勵まば。天地を動かす大力量を蓄ふるに足るを知
 るべし。花子は田舎もの。小官輕吏の威權を羨み。輕々しく
 も出奔して官途を望むものにと。思ひにければ問を設け
 て其意中を探り。に流石は少年の持重の勇に乏しく平生
 の思ふ所口を衝て迸り出でつ。一も二もなく少壯の官途
 に急なるを尤めたりければ。花子は其見識の凡ならざるに
 驚き。が扱は世の持離す自由黨とやらん云ふものなるか
 と思ひ。又激してこれを問ふに。冷乎淡乎として。彼等自由黨

の壯士輩を視ること。樓蛾も童ならざる如く。一貧少年の眼
 ども思はれず。よく。此上は煽て。言はせつ。其深淺を
 測らんもの。甘言もて之を煽くに。彼れ笑而不答。心自問な
 るもの。如く最後の一言に。隱然如一敵國といへり。只此一
 言のみ。彼が花子に答へたる彼の目的は。奇なり不思議な
 り。鎌太郎。我一身を托すへき好機に會して。遂に其希望を云
 はす。怪しげなる漢語を口走り。のみにして。奥床しけに見
 せ掛けり。凡庸の徒は拙者は云々の目的なり。此々の希望な
 り。なぞ揚言して。人聽を動かさん事をのみ務むるに。彼は花
 子が人品を鑑識するに就て。間髪を容れざるの危機に方り。
 能く其煽てに乗らすして。喋々世上の輕薄兒に倣はざりし
 は。此ぞ天の鎌太郎に賜ひし深沈厚重の性質の一部分なる

へ。隠然如一敵國。此語の花子を驚かしたる事。雷の屋上に震うに均しく。きつと容を改めて鎌太郎に向ひ、「イヤ御目的を伺ひましたのは私の過です。目的は容易に言れぬもの。言はるゝ位なら成就も六ヶ一いもので。成ほせれつゝやらない苦てす。夫で此から誰を便と申人もなくて京にね出になつても。むだな日を費し。且はね望みどふりによい場所かないようでは。折角の思召も水の泡と申もの。トニカッ一且私の方へね出になりましたら。母紅樹とも相談をいたして。御勉強の出来るように。取計をいたしまいようが。いかいでございませうか。此は思掛ない仰です。今日のね助ばかりでなく。後來の世話を見ず知らずの私を。決して御遠慮には及びませせん失禮ながら英學は初學でれいでなざるな

ら。私をね相手をして。イヤアノ近所に教師もございませうから。然らばは言葉に従つて。世話をかふむる事に願ひまよふ。重々の御恩。其御禮には及びません。追々舟も着きまよふ。商人此は失禮ながら測らす御同船をいたしまよて。千村君の艱難辛苦。殊に令嬢の義氣のほどを承り。誠に感心いたしませう。拙者の姓名は。此名刺に。以來御別懇に願ひませう。左様でございませうか。測からず失禮を致しませう。なんだかさつぱり譯が分らない。

かくて鎌太郎は花子の義氣によりて。其世話を受ける事に決せし。かほ。今更心強く眼も自ら清らかなり。船窓より打眺めて。彼ころ堅田ならぬ。これが比良にやなど思ふうち。早くも瀬笛の聲もろどもに。船を岸に繋ぎ。かほ。乗客先を争ふて

五時の瀛車に乗後れしと。逸足出して停車場にかくるもあり。名に逢ふ坂の知るもいらぬも別れくに立去りける。中に春田花子女史は。鎌太郎を携へて上等車に乗り。又も烟と共に京華を指して入りにけり。或人の車中にて明吟するを聞けば。うき事のなほ此上につもれか。限ある身の心ためさん。

八十

千村鎌太郎春田花子等の行末。及び鈍翁が事。鎌太郎が實父母の事。同船の江州商人の事等。一に其結局を示さんには。巻を重ねされは能はず。然れども今書肆依頼の紙數に限りあり。暫らく此一段を以て篇を終る事となせり。他日花吹雪と稱するものを梓して。以て此缺を補ひ篇を結ばんと欲す。乞ふ江湖の看客此意を諒せよ

著者ゝるす

さいなみ完

西村天囚居士著

花吹雪 近刻

右さいなみの後篇不日出板

致候間御購讀冀上候也

さいなみ完

八十一

版權登錄



明治廿一年十二月廿二日印刷
全 年全 月廿四日出版

定價金貳拾錢

著 者

鹿兒嶋縣士族

西村 時彦

東京神田猿樂町
三丁目一番地

發 行 者

京都府平民

藤井 孫兵衛

京都府上京區第卅組御幸町
姉小路北大文字町第八番戶

印 刷 者

京都府士族

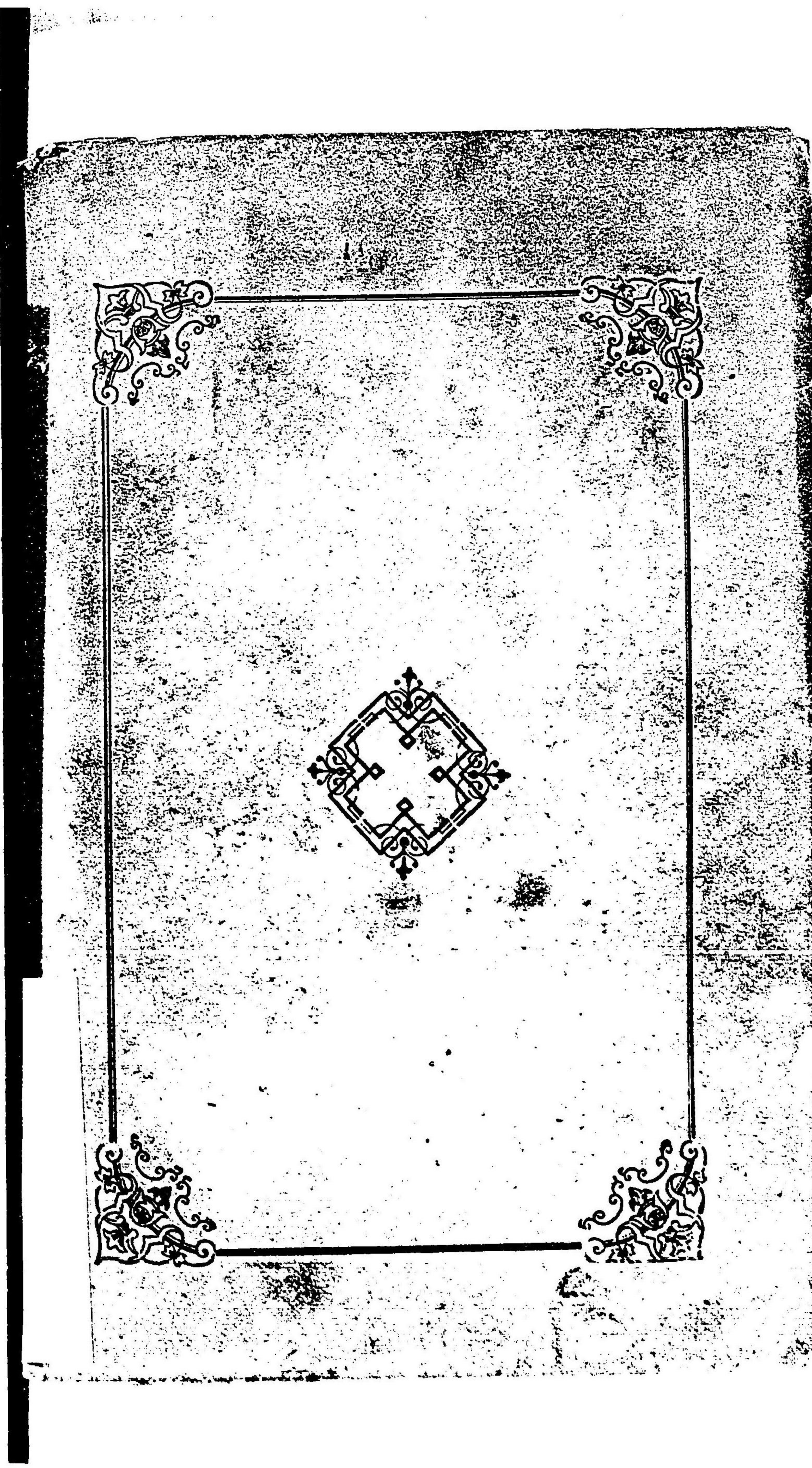
一色 昌和

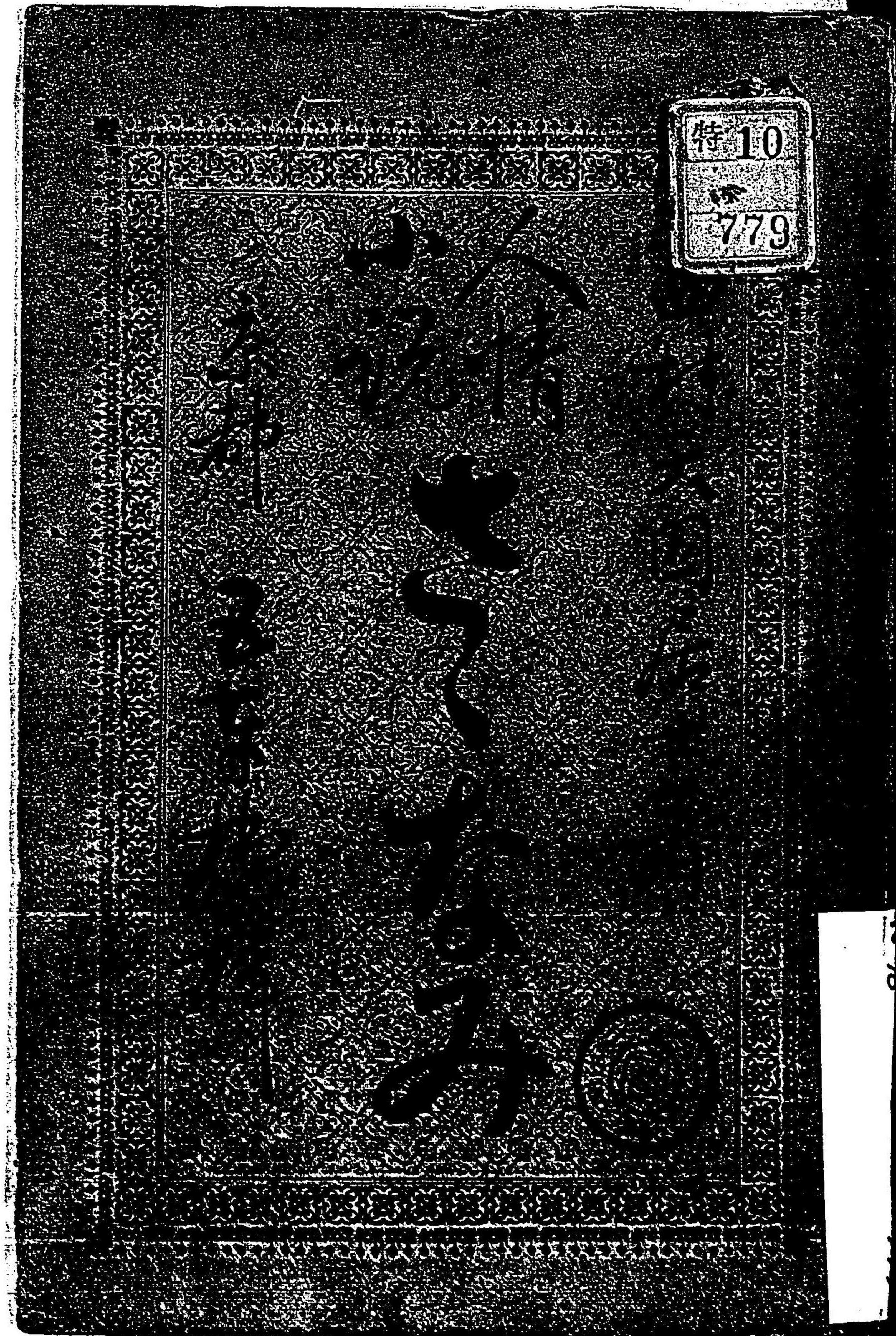
下京區第廿七組
茶屋町廿一番戶

印 刷 所

商報會社

京都府上京區第廿九組三條
東洞院鼻華院前町十七番戶





093842-000-7

特10-779

さゝなみ (人情小説)

西村 天囚/著

M21

DBQ-1275

